

〈シンポジウム〉大峯顯とフィヒテ

シンポジウム

「大峯顯とフィヒテ」司会者報告

入江 幸男

1. シンポジウムの意図

故大峯顯先生(1929.07.01-2018.01.30)は、『フィヒテ研究』(1976)を公刊し、1985年には、隈元忠敬先生、長澤邦彦先生とともに、「日本フィヒテ協会」を創立し、戦後日本におけるフィヒテ研究を牽引してきた中心人物の一人である。他方で、大峯は、真宗の僧侶、研究者として、親鸞の思想について多くの著作を出版している。また、大峯は、学生時代に高浜虚子に師事して以来、多くの句集を出版するという俳人としての仕事も行っている。この哲学、宗教、芸術に渉る仕事が大峯の成し遂げたことである。大峯自身は、ある本で次のように述べている。

「私は今三つ仕事をしております。一つは寺の住職です。それから、長らくヨーロッパ哲学の研究をしてきました。近年は仏教哲学を研究していますので、哲学の徒でもあるわけです。そして三つ目は俳句の実作です。決して俳句を片手間にやっているわけではなく、一生懸命にやっています。人から「お前には仕事があるが、どれが本当のお前だ」と聞かれたら、「三つとも私です」としか答えられません。よく「二足の草鞋」と言いますが、私の場合は「三足の草鞋」です。」(大峯あきら著『命ひとつ よく生きるヒント』小学館、2013年、p.6)

この整理の仕方だと、大峯の仕事は寺の住職の仕事、哲学研究、俳句の実作の三つに区別されており、この哲学研究の中心が、フィヒテ哲学と仏教哲学の研究である。

今回は、大峯顯のフィヒテ研究の全体を捉えておきたいと考えて、このシンポジウムを企画したが、大峯のフィヒテ研究は、当初から仏教哲学への関心と深く結びついていたと言える。したがって、大峯のフィヒテ研究を理解するには、それを仏教哲学との関係において捉える必要がある。欧米の哲学研究者や、アジアにおける西洋哲学研究者が、グローバル化の中で改めて東洋思想に関心を向けている中で、西洋哲学(フィヒテ哲学)と東洋思想(大乘仏教、浄土真宗)の両方を研究した大峯が、どのような視点で両者を関係づけて研究していたのか、を明らかにすることは、ぜひとも必要なことだと考えて、このシンポジウムを企画した。このシンポジウムを開くにあたって、大峯と同じようにフィヒテ哲学と仏教思想の両方に造形が深く、かつ大峯と親交の厚かった岡田勝明、美濃部仁の両先生に発表をお願いできたことは最高の人選になったと考えている。

2. シンポジウムの構図

大峯の『フィヒテ研究』の1章から6章は、最初は『フィヒテの宗教哲学』という題目の博士論文として、京都大学へ提出されたものである。その後、第7章を加えて、『フィヒテ研究』として出版された。つまり、大峯は、最初からフィヒテ哲学を宗教哲学として捉えようとしていたことがわかる。大峯は、自己と絶対者の関係を論じることを、宗教哲学と考えていた。

岡田と美濃部の発表は、大峯のフィヒテ研究の中心テーマを「自己」と捉え、またそれを大峯の仏教理解と関係づけて論じる点で同じであるが、岡田は大峯の「真宗」理解を取り上げるのに対して、美濃部は大乗仏教の「空」の概念を取り上げるという違いがあり、それぞれが考える「自己」の問題も焦点が異なるものになっている。それは、岡田と美濃部の哲学的関心の違いによるものであると同時に、大峯の哲学研究の豊かさの現れでもある。

岡田は、<大峯が、フィヒテに読み取る「自己」の問題を、自己と絶対者の関係をどう捉えるか、という問題として捉え、この問題を、真宗における「名号」ないし「称名」についての大峯の独自の理解によって解決しようとしている>ということ进行を明らかにする。

他方、美濃部は、<大峯が、WL1804-IIに於いてフィヒテが論じた「純粹存在」を高く評価し、それと大乗仏教の「空」の概念との類似性を主張するとともに、他方でフィヒテの「純粹存在」の概念には自己否定がなお不十分であると考えていた>ということの確認と、その検討を行う。

以下に、岡田と美濃部の発表の概略を紹介したい(以下の紹介は当日の配布資料によるものである)。

2. 1 岡田勝明の大峯顯論

岡田によれば、大峯が、フィヒテ研究に向かったのは西谷啓治からの勧めによるようだ。フィヒテに対する大峯の問題意識は、西谷の次のような問題意識の影響を受けている。「『自己』という「かなめ」の一点をあくまで掘り下げて行った彼[フィヒテ]の思惟は殆ど空前絶後の業績である」(西谷)(岡田の当日配布資料p. 2)。大峯自身もまた『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会編)の「創刊号」の「創刊のことば」で、「フィヒテはまた、西洋哲学の全歴史の中で、「自己」という哲学の原理を最も深く掘り下げたDenkerである」と述べている。

次に岡田は、大峯の『フィヒテ研究』についてその諸章を元の執筆順に取り上げる。「執筆順に見ることで大峯の問題関心とそれに沿ったフィヒテ考察の転回を追うことができる。すなわち、1801年から1804年の知識学への転回が、考察の焦点としていつも見られている。知の自己否定の立場から、光を生きる立場への、いっそう自己否定の立場をその底へと深めた展開にして転回がある。」(当日配布資料p. 9)

「しかし、なお根本的な問題が残る。それは、光である知そのものの根拠が、知を絶対的に超越する絶対者であることが明らかにされたが、そもそもなぜ光が知を貫徹するのか、……の解明である」(同所)。大峯は、この課題を、「名号」ということばの解明において果たした。

「名号」とは「阿弥陀仏」という「名」を「号する(心の声を発する)」こと、すなわち「南無阿弥陀仏」と「称名」することである。名号について大峯は次のように語る。「名号としての言葉は、如来が

衆生に何かを語るのではなく、如来それ自身を衆生に向かって語ること、自分自身を名乗ることです。これは、言葉というものが生れる真の根源は、人間ではなく仏のほうにあるという深い真理を述べたものです。名号とは、人間が勝手に作り出した名ではなく、言葉になった仏のことなのです。」(大峯あきら『命ひとつ』)

「大峯において「自己・知・絶対者」の問題は、根源語的なことば、すなわち「本当の言葉」に収束する」(発表資料p.11)。このことで大峯は、「三足の草鞋(哲学と宗教と芸術)」を一つに語りうる立場を自己のものとした、と考えられる。端的に言えば、言語には、実用的言語、概念としての言語、さらに詩的言語の次元があるが、さらに「宗教的言語」というあり方があるという、ひらめきに似た、しかしたしかに思索と実践による言語観の深まりという大峯に独自の達成をなしたのである。」(当日配布資料、p.9)

岡田が深い関心をもって紹介している大峯の『命ひとつ』の中での言語の区別(実用的言語、概念としての言語、詩的言語、宗教的言語)と、この言語理解が「名号」の理解において極まることの指摘は、大峯の晩年の思想的達成を理解する上で大変重要である。この言語理解は、どこまで符合するかはわからないが、奇しくもフィヒテ晩年の『動物性磁気に関する日記』(1813)の中の言語理解「言語は精神的伝達のエレメント(境位)である」に近いように思われる。

2. 2 美濃部仁の大峯顯論

美濃部は、大峯の論文‘Das Sein bei Fichte und die Leere im Mahayana-Buddhismus’ (*Fichte-Studien*, Band 46, 2018) (日本語論文「Fichteにおける Sein と空」の独訳に美濃部自身が協力)の中に、大峯の長い間の「自己」についての思惟が凝縮されていると考え、それを紹介する。

大峯は、フィヒテのWL1804-IIの「自らの内に閉じられた自我」(in sich geschlossenes Ich)としての「純粹存在」(reines Sein) に注目する。フィヒテがこの「純粹存在」を持ち出すのは、自我は対自性を根本形式とするが、その対自性の本質ないし根拠を問い求めて、それを「純粹存在」に見出すからである。大峯によれば、この「純粹存在」は、Schellingにも Hegelにもないフィヒテ独自の思想としてすこぶる注目に値する(当日配布資料p.3)と考える。そして、大峯によれば、これは、大乘仏教の「空」の見地に接近した性格を持っている。「純粹存在」(絶対者)も「空」も、自己がそれによって成り立つものであり、また「フィヒテの絶対者も仏教の無我的自己も、共に対自性を超えているが、しかし、それはともに対自性がその「内に」あるようなもので、そういう意味で「知」という性格を持つものである」と言えるからである(当日配布資料p.4)。

しかし、大峯によれば、フィヒテの「純粹存在」と大乘仏教の「空」の間には、重要な差異がある。「大乘仏教の「空」が自己否定を介しての自己肯定という構造を持っているのに対して、Fichteの *reines Sein* は単純な自己肯定を本質とするように見える点」(当日配布資料p.3)である。大峯は、フィヒテの「純粹存在」には「自己否定という点でなお不十分なものがあるように思う」(同所)と述べている。

美濃部は、フィヒテの「純粹存在」(絶対者)について大峯の最終的な理解をこのように捉えた後、『フィヒテ研究』以後の大峯の諸論文を検討して、フィヒテの絶対者についての大峯の理解の進展あるいは揺れ動きを、辛抱強く丹念にたどってゆく。それを踏まえて、美濃部自身は、次の

ようにいう。「自己が絶対者を生きるとフィヒテが言うとき、そこで考えられているのが、単に自己が絶対者に面して自己を否定するということであるかどうか、つまりフィヒテの絶対者には否定性が含まれていないと言えるかどうか、それには疑問が残る。」(当日配布資料p.10)「WL1804-IIの現象論をより詳細に研究していくならば、フィヒテの思想は、先生が書いている以上に大乘仏教に近いということが明らかになるのではないと思われる。」(同所)

フィヒテの「絶対者」と、大乘仏教の「空」の関係について、美濃部は大峯とは違った結論の可能性を検討するために、フィヒテのテキストと大峯のテキストを丹念に読みすすめており、いくつかの重要な指摘を提供している。

3 まとめ

岡田は、大峯の哲学研究の当初からの課題であった「自己と絶対者の関係」の探求は、最終的に、「名号」の独自の解釈である大峯の言う「本当の言葉」で、自己と阿弥陀仏を結合するということに辿り着いたと考える。「ことばというものが生まれる真の根源は、人間ではなく仏のほうにあるという深い真理を述べたものです。名号とは、人間が勝手に作り出した名ではなく、言葉になった仏のことなのです。」(大峯あきら『命ひとつ』)この文脈では、大峯はフィヒテの「絶対者」を浄土真宗の阿弥陀仏に相当するものとして捉えている。

美濃部は、大峯が、フィヒテの哲学と大乘仏教の関係をどう考えていたかに注目する。この文脈では、大峯は、フィヒテが後期知識学において考えていた「純粹存在」(絶対者)を大乘仏教の「空」と似たものとして捉えている。ただし、大峯は、フィヒテの純粹存在(絶対者)は、「自己否定という点でなお不十分である」と考えている。

岡田と美濃部の発表により、大峯は、フィヒテ哲学と仏教思想の交わる点を、真宗の「名号」論と、大乘仏教の「空」論の二点から考えていたことが明らかになった。また、そこにどのような可能性および問題があるかも、岡田と美濃部によって詳細に論じられた。今回大峯の哲学的仕事については、岡田、美濃部の両氏のおかげでその輪郭がかなり明らかになった。

ところで、俳句の実作は、大峯のもう一つの仕事であったが、それもまた何らかの仕方で彼の哲学研究と関係していただろうと思われる。俳句の実際の背景には、芸術論や「詩的言語」についての思想があるはずなので、それが研究され、大峯の仕事のより深い豊かさが、いつかさらに明らかになることを期待したい。

虫の夜の星空に浮く地球かな

あきら